

中間評価	
○ 成果と▽ 課題	● ▼ 期末への方策等
<p>国語</p> <p>○自分の書いた文章を読み直したり、他の文章のよい点を取り入れて書いたりすることへの意識が高まってきている。</p> <p>▽目的意識や相手意識をもって、読んだり書いたりすることが苦手な児童が見られる。また、最後まで集中して話を聞き、話の要点を捉えようとする意識も高めていきたい。</p> <p>算数</p> <p>○用語や公式などの意味、計算など、基礎的な知識・技能の習得は概ねできている。さらにこれらを活用し、適用・応用問題への取り組みを重ねていく。</p> <p>▽説明を要するような記述式の問題を苦手とする児童が少なからずいる。立式ができて、式を導き出した考えを説明したり、図や数直線などを用いて立式や考え方の説明をしたりすることができるように指導する。</p>	<p>●今後も文章を書く機会を多く取り入れ、自分の気持ちを的確に表現する語彙を豊かにしていく。他教科においても、自分の考えをすすんで書く活動を取り入れたり、総合的な学習の時間での話し合い活動などでも意見を交流する場を意図的に設定したりして、自分の思いや考えを伝える活動を多く取り入れていく。</p> <p>▼文章を要約することや情報を取捨選択しながら読み書きする学習活動を取り入れた授業を計画的に行っていく。 自分の伝えたいことや知らせたいことを明確にしたり、相手の話の要点を捉えながら聞いたりする活動を計画的に進めていく。</p> <p>●単元ごとに学習進度に合わせて、ベーシックドリルを活用した反復練習を継続して行い、基礎的な知識・技能の定着を図っていく。</p> <p>▼自分の言葉で説明する問題を苦手とする児童へは、記述式の問題などに取り組む機会を多く取り入れ、表現力が身に付くように今後の学習計画に取り入れていく。 ICTを活用し、視覚的に理解できる教材提示を取り入れた授業を行い、説明の仕方を身に付けるように学年ごとに学習計画を立てていく。</p>

期末評価	
成果と課題	課題への方策等
<p>【第1学年】</p> <p>国</p> <p>○文章を書く際に、自分の経験したことや体験したことなどについてすすんで書くことができている。</p>	<p>国</p> <p>・今後も文章を書く機会を多く取り入れ、すすんで書こうとする態度を育てていく。 他教科においても、書く活動を取はじめ、自分の気持ちを表現する活動を多く取り入れていく。</p>

▽長音, 拗 (よう) 音, 促音, 撥 (はつ) 音などの表記ができ、助詞の「は」, 「へ」及び「を」を文の中で正しく使うことに課題がある。

算

○数の数え方, 読み方, 書き表し方, 大小, 順次など数について, 理解できている。

たしざんやひきざんなどの計算問題の習得は概ねできている。

▽文章を読み, 立式をし, 答えを導き出すことが苦手な児童がいる。

【第2学年】

国

○文章を書く活動を継続的に取り組んだことで, つながりのある文章を書いたり気持ちを書き表したりすることができるようになってきている。

▽既習の漢字を日常で使用することができていない児童が多い。

算

○児童が説明しながら計算したり, ドリルパークの活用を積極的に取り組んだりしたことで, 計算問題の習得を概ねできている。

▽文章問題から正しく立式できていない児童がいる。

【第3学年】

国

○デジタルドリルや漢字プリントの活用によって, 学習した漢字や言語などの基礎的な知識が4月当初よりも身に付いてきている。また様々な図書に親しむ機会をもつことによって, 語彙を増やすことができている。

▽既習の漢字や語句を日常的に使用しないので, 忘れてしまう児童がいる。

算

○デジタルドリルの活用により, 基礎的基本的学習事項については, 身に付けることができている。

・ドリルパークやプリントを活用した反復練習を継続して取り組み, 基本的な知識・技能の定着を図るとともに, 語彙を豊かにしていく。

算

・单元ごとに学習進度に合わせて, ドリルパークを活用した反復練習を継続して行い, 基本的な知識・技能の定着を図っていく。

・ICT機器を活用し視覚的に提示することで, 理解が進んだ。言語による説明だけでは, 理解が難しく, 集中して取り組むことができない児童が多い。引き続きICT機器の活用を継続していく。

国

・正しく書けている文章を紹介したり, 他教科でも書く活動を継続的に取り入れたりしていく。

・ドリルパークの活用, 既習の漢字を復習する時間を設けていく。

算

・今後も, 計算方法を友達に伝える時間を設けることで, 間違いに気付いたり, 理解を深めたりできるようにしていく。

・ドリルパークの活用。立式に関連のある数字や聞かれていることに注目させる。場面を想像できるように, 図に表すようにしていく。

国

・漢字の読み書きについては, デジタルドリルと小テストの繰り返し, 間違い直しを徹底することで改善してきている。

・デジタルドリルは継続して活用していく必要がある。また, 日ごろから作文やワークシートなどの書く活動において, 既習の漢字を使って書く指導をしていく。

算

・今後もデジタルドリルの活用し, 基礎的基本的学習事項の定着を図っていく。

る。

▽桁数の多いかけ算の筆算では計算ミスが多かったり、円や三角形を正確にかけなかったりする。

【第4学年】

国

○国語科だけでなく、他の教科でも自身の考えを文章に表したり、チラシなどを作成したりすることで、自分の考えを整理して相手に伝える力が向上してきている。

▽既習の漢字をいつでも正しく書くことについて、課題がある児童がいる。

算

○デジタルドリルを活用し、基礎的・基本的な学力が向上してきている。

▽問題場面を式に表す活動や、式をよむ活動について苦手としている児童がいる。

【第5学年】

国

○課題に対する音声言語による話し合いの積み重ねで、他者との対話ができるようになってきた。また、課題に対する自分の考えを明確にもてるようになってきた。

▽まだ、課題に対して、自分の考えを文字言語で書くことが苦手な児童がいる。他教科も含めて、自分の考えを明確にもち、書くことができるよう支援する。

算

○四則演算の習熟に意欲的に取り組むことができるようになってきており、基礎的・基本的な知識・技能の向上が見られる。

▽四則演算を苦手としている児童も少なからずいる。

・位をそろえて数字を書いて計算することを意識させ、コンパスや三角定規を正しく使って図形をかく指導を繰り返し行っていく。

国

・今後も引き続き、教科を横断的にとらえた年間指導計画を作成し、教育課程全体を通して資質・能力の向上を目指していく。

・ICTを活用した作文と、紙に書く作文をバランスよく行い、既習の漢字を書く指導を引き続き行っていく。

算

・引き続きデジタルドリル等のICT機器を活用し、児童の確かな学力の向上に努めていく。

・問題文にある数字を演算するだけでなく、問題場面を式にあらわす指導を引き続き続けていく。

国

・話し合い活動においては、タブレットを活用し、互いの思いや考えをシェアし、交流していく。

・課題に対する自分の考えを明確にもつ学習や、漢字練習の習得については、デジタルドリルより、紙媒体のドリル学習の方が、児童の発達段階から知識・技能の習得もしやすい実態が表れているため、ノートなどの紙媒体なども繰り返し行っていく。

算

・デジタルドリル等の効果的な活用を進め学力向上を図るとともに、児童の発達段階から知識・技能、思考・判断・表現の育成に努めやすいノートやプリントなどを活用した四則演算や図形などの習得も繰り返し行っていく。

・放課後などを利用し、既習事項の復習を行う。

【第6学年】

国

○文章を書く際に、対象に合わせた内容や表現方法を意図的に選択することができるようになってきた。デジタルドリルを活用し、繰り返しの漢字の習熟に努めたことにより、既習の漢字については多くの児童が身に付けている。

△見直すことや推敲することで、よりよい文章表現にしていこうと思考することを今後の課題である。

算

○作図や記述式の問題に対して自分の考えを表現することができるようになってきている。デジタルドリルを活用して、繰り返し計算問題に取り組むことで、基礎的基本的学習事項については、多くの児童が身に付けている。

△文章問題に関しては、問われている内容を理解し、立式することを今後の課題である。

【特別支援】

○児童一人一人の実態に応じた課題を設定したことで、できることが増え、自信や達成感をもって活動に取り組める児童が増えている。

○読み書きプログラム教材やタブレット端末の活用を通して、意欲的に学習に取り組むことができている。書字への苦手感のある児童がタイピング入力を習得することで書くことへの負担の軽減につながっている。

○小集団の活動では、ICT機器を活用し、視覚優位の児童にとって分かりやすい教材提示をすることで、ルールの理解向上につながってきている。

△通常学級での代替え機器としてのICT利用には課題を残している。

△MIM-PMやURAWSSを利用したアセスメントを行ったが、その結果から個に応じた課題を設定することが難しくなってきている。

国

・自分の書いた文章を読み返したり、友達と読み合ったりすることや物語文、説明文等、様々な種類の文章に触れる機会を増やしていく。

算

・文章問題を数直線や図形等で表現し、内容への理解を深め、立式し問題を解いていく経験を積み重ねるようにしていく。また、デジタルドリルを活用し、適応問題、応用問題へも取り組むようにしていく。

・児童一人一人が自分に合った学び方を教室でも行えるように、今まで以上に担任とまなびの担当とが連携を進めていく必要がある。

・教室での書字の代替機器としてのICT利用を広めるために、教職員に向けた校内研修を行っていく。

・授業の中で代替機器を利用することで、学習への困難が軽減され個に応じた学習がすすめられるという経験を児童自身に積ませていく。

・今までのMIM-PMやURAWSSを使ったアセスメント結果のデータを集め、分析し課題設定に生かしていく。